

1. 工法選定について

1-1 総論

工法選定にあたっては、現場条件等を十分考慮し、施工可能な工法のうち経済比較を行い決定するものとする。

(解説)

工法選定は、通常考えられる工法を数種類抽出し、施工可能なものと不可能なものを分類し、可能なもののうち経済比較により工法を決定する。

1-2 開削工法

開削工事の工法は、マンホール間の平均掘削深(H)より算出するものとし、下記の土留材長さ(L)の範囲において経済比較を行い決定するものとする。

$$1.5\text{m} \leq \text{軽量鋼矢板建込(L)} \leq 4.0\text{m}$$

$$1.5\text{m} \leq \text{建込簡易土留(L)} \leq 6.0\text{m}$$

また、現場条件でこれにより難しい場合は建込工法の外、打込みの伴う鋼矢板工法やH鋼横矢板工法を別途検討する。

1-5 補助工法

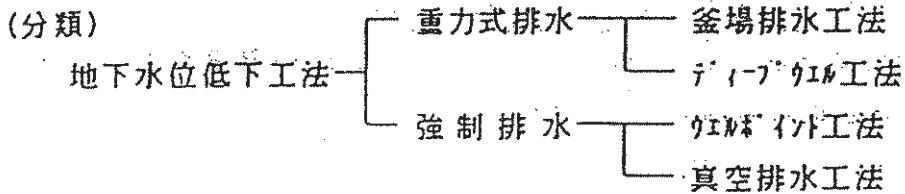
(地下水水位低下工法)

開削工事においては、次の順に選定するものとする。

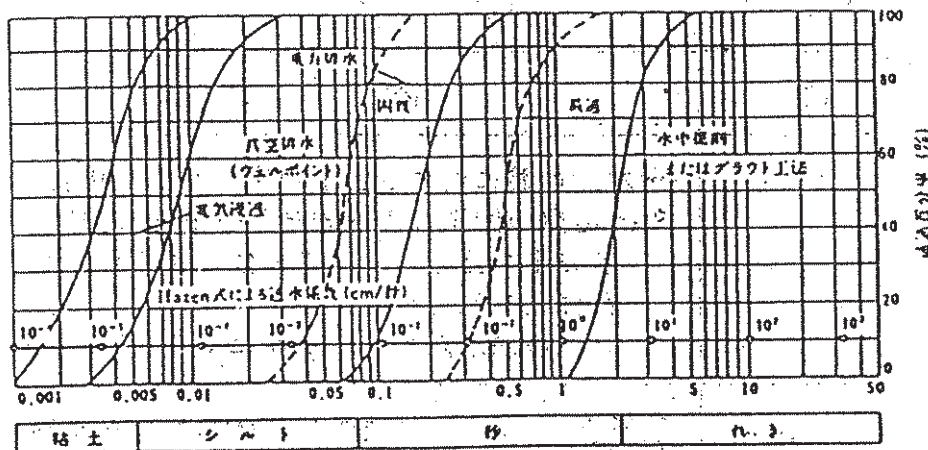
1. 釜場排水工法
2. ウェルポイント工法
3. その他

(解説)

地下水水位低下工法の分類、および土の粒土及び透水係数を目安とした適用範囲は次のとおりである。



(粒土及び透水性の目安とした工法の適用範囲)



「土と基礎の新工法」(社)土質工学会(昭和35年)

(一般に)

- ・ウェルポイント工法…… 掘削深が5 m以下
粗～細砂、無機質の粗粒シルトなどの砂系の土質で
粒径が $5 \times 10^{-3} \sim 0.5 \text{ mm}$ 程度の場合
- ・釜場排水工法…… 地下水位の低いところや、水位が高くても粘性土の場合
- ・その他…… デープウェル工法があるが、県内の管渠工事では一般には使用されていない。